# 再婚旅行

佐野洋

昭和38年12月1日初版発行 ©
再婚旅行
定価＝350円
著者＝佐野洋
発行者＝稲並昌幸
印刷所＝ミイレー印刷株式会社
発行所＝株式会社・宝石社
東京都港区芝西久保巴町12
電話＝〈431〉5294・1906・5997
振替＝東京・69414
落丁本・乱丁本はお取り換えいたします

# 再婚旅行

佐野 洋

# 目次


第Ⅰ章 7
第Ⅱ章 27
第Ⅲ章 59
第Ⅳ章 87
第Ⅴ章 115
第Ⅵ章 143
第Ⅶ章 171
第Ⅷ章 207
第Ⅸ章 227


此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

装幀　吉原澄悦
カット　真鍋博

# 再婚旅行

# 第Ⅰ章

## 1

女は最初にからだを与えた男が忘れられない、という俗説がある。私は、日ごろ、この説を軽蔑していた。女の中の動物性だけを強調する、男たちの勝手な想像、そう考えていたのだ。

二十才で結婚して、三年後に離婚した相手が、私にとっての最初の男だったが、私は彼のことなど、忘れてしまっている。いや少なくとも、どうしても忘れられない男ではなかった。だから、私は思っていたのだ。最初の男が、特別の意味を持っているということはない……と。

しかし、それなら、なぜ私は、あのとき、はっとしてふり向いてしまったのだろう?

「ねえ、君」

という、わずか、それだけの言葉であった。しかも、それは店内の猥雑な騒音の中で、辛うじて聞きとれるほどの声に過ぎなかった。むろん、私に対する呼びかけではない。それは、聞いた瞬間にわかっていた。にもかかわらず、私がふり返って、その声の主をたしかめる気になっ

たのは、なぜであったか、その声、或いは口調に、覚えがあったから、と言うほかはあるまい。
事実、私は無意識に、そちらを向いて、その声の主を確めたとき、ああ、やっぱり彼だったと、自分の耳の正確さに、感心したのであった。
それは、間違いなく、五年前に別れた昔の夫、河原田重吉だった。髪には軽くパーマをかけ、薄く色のついた眼鏡をしてはいたが、私の眼はごまかされなかった。尖り気味のあごに特長があったし、そんな部分的な異同にもまして、全体のからだつき、恰好が、河原田そのものだった。
しかし、つぎの瞬間、私は顔を元に戻していた。彼と顔を合わせたくなかったのだ。それは、当然であろう。五年間という歳月が流れ、その間には、私の上にもいろいろな変化があったが、私がこれまで法律的に結婚しだのは、彼一人である。そして、離婚も必ずしも、スムースに運ばれたのではなかった。二人が顔を合わせば、五年という時間の経過にもかかわらず、気まずいものが流れるだろうと予測された。
ことに、場所が場所である。ここで顔を合わせば、彼と私とは、客と女給という関係で挨拶を交し合わなければならない。
私は酔客のばかげた話に相槌を打ち、ときには自らも羽目を外さなければならないという、いまの仕事を、同僚たちのようには、卑しんでいなかった。それはあくまでも、生きて行く上の職業である。サラリーマンたちが、上役にぺこぺこするのと、私たちが、客にお世辞を使う

のと、本質的には、どこに違いがあるのだろう。

しかし、そうは考えていても、〃離婚以来〃最初に彼と会うのが、こうした場所であり、しかもそこが私の職場であるというのは、いやであった。やはり、一種の屈辱を感じるのだ。割り切っているとは言いながらも、私は、まだ社会通念という尻尾をつけているらしい。

「もう一杯いい？」

私は、飲みほしたハイボールのタンブラーを、軽くかかげてみせ、私の客の沢井にねだった。

「ほう？　珍しいね。今日は制限速度がないのかい」と、沢井が応じた。

私は、日ごろ、客に酒を勧められると、一時間にハイボール一杯というピッチで、飲むことにしていた。この速度なら、酔い方も適度であるし、決して乱れることはなかったからだ。常連の間には、私のこの制限速度は、かなり知れわたっていた。

私は、自ら決めた制限速度を、なぜ破る気になったのか、沢井には言わなかった。ただ、

「ええ、ちょっとね」

と、短く答えるのに止めておいた。

というより、私自身にも、急にアルコールをとりたくなった理由が、正確にはわからなかったのだ。強いて言えば、もし河原田に気づかれた場合にも、酔っていた方が便利だという計算だったとも言えよう。或いは、なまじ、意識がはっきりしていては、河原田のことが気になっ



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ていけないと、考えたからなのかもしれない。
しかし、そうは言っても、私はやはり河原田を気にしていたようだ。自分が彼に見つけられたくはないが、こっちはひそかに彼の様子をうかがい、いま、彼がどうしているか、どんな生活を送っているのか知りたいと思っていた。
ときどき、私はそれとない視線を彼の方へ送ってみた。恐らく、誰かが、そんなときの私を見たら、何と眼つきの悪い女だと思ったに違いない。
河原田には、男の連れがあった。恐らく、その男が、彼をここに案内して来たのだろうと思ったが、その客にも、私は覚えがなかった。彼らのボックスには、晴子と梨江がついている。そこに、割込む形になるのも、私はいやだったし、私自身も、沢井の席にいる義務があった。
そのうち晴子が何かの用で、カウンターの方へ立った。私も用を思いついたふりをして、彼女を追った。
「あの人たち、あんたのお客さん?」
「ううん。なぜ?」
「じゃあ、梨江さんなのかしら……?」
「違うの。初めてですって……」
「そう?」
私は、ふと不安になった。河原田がどこかで私を認め、あとをつけた結果、私がこのパンセ

に勤めていることを知り、同僚と様子を見に来たのではないか？　だが、そうは考えても、晴子に向って、

「あたしのこと、何か聞いていなかった？」

などと、質問するわけにはいかない。妙にかんぐられては迷惑だし、第一、私のプライドにも関係することだ。

「どうしたの？　あんたの知っている人？」

果して、晴子は疑問を持ったようだ。

「ううん。そうじゃないんだけれど……」

「変ねえ」

と、晴子はいたずらっぽい笑いを見せた。「どっちの人かしら、大仲さん？　それとも細田さん？」

「ええ？　それが、あの人たちの名前？　変だわ」

酒場に友人と二人連れで来て、互いに偽名を呼び合う男たちは、割に数多いものだ。本名を出したところで、何ということもないのだろうに、一種の韜晦趣味なのだろう。そうでなければ、バーで働いている女たちに、わざわざ本名を知らせるまでもないと、私たちを侮辱した考えを持っている人たちである。私は晴子から、あの二人が「大仲、細田」と名乗ったと聞き、河原田もついにそんな悪趣味な人間になったのかと、不快な気持になった。

「変てことないわよ」
晴子は、怒ったように言った。
「名刺貰ったんだもの、間違いないわ」
「本当？　ちょっと見せてよ」
私は、一つところで立話をしていたのでは怪しまれると思い、晴子をトイレットの方へひっぱって行った。
「いいわ、でも、何だか意味ありげだな、おごらせるぞ」
「そんなんじゃないんだ。でも、おごれというなら、焼き芋ぐらいおごるわ」
私は、晴子が帯の間から出した名刺を、ひったくるようにして受取った。
「東京綜合企業研究所
企画課長代理　大仲吾一」
「大東製鉄株式会社
営業部次長　細田善三郎」
名刺は、この二枚であった。
では、別人なのだろうか？　私はもう一度、ものかげに身を隠しながら、男たちの方をうかがった。
ふと、別人かもしれないという考えも浮ぶ。たしかに、髪は縮れているし、眼鏡をかけてい

る点など、別れた夫の河原田とは違っている。そして、世間には、他人の空似がないわけではない。

「どっちが、大仲さんなの？」

私は、晴子に聞いた。もはや、彼女に変なかんぐりを受けてもかまわないという気持になっていた。ピッチを上げ、無理に、のどへ流しこんだハイボールが、少しずつ回り始めても来たようだ。

「ほら……」と、晴子も、のぞきこむようにして言った。「パーマをかけている人よ、あの人ね、男のくせに、マニキュアもしているのよ、ちょっとキザっぽいの」

「へえ……」

それでは、やはり人違いだったのだろうか。私はそう考えた。かつての夫には、そんな習慣はなかった。それどころか、身なりの一切を構わない方であった。黙っていれば、膝の抜けたズボンを、平気ではいて外出したし、頭に油をつけたこともない。まして、自分から進んで、爪の手入れをすることなどなかった。

彼が私を求めそうに見える夜、先手を打って、

「あなた、爪切ってちょうだいよ」と命ずる習慣が、そのころの私たち夫婦には、いつの間にかできていたほどだ。

そういうときでさえ、私が監視していないと、彼は長い爪を歯で噛み切って、ごまかしてし

まうのであった。
いくら五年という歳月があったとしても、あの彼が、マニキュアするとは信じられない…。

## 2

そのとき、着物の上から、私のヒップを撫でたものがいた。私は、どういう表情を作るべきかを迷いながら、ふりむいた。相手によっては、怒ったふりをする必要もあるし、逆に、笑顔でその手を押し止めなければならない相手もいる。
先刻まで、私がついていた沢井であった。
「なんだ？　黙って立ったから、どんな用かと思ったら、こんな陰の方で、よからぬ相談していたのか？」
彼がそれほど怒っていないらしいことが、私を安心させる。
「違うわよ。そんなんじゃないわ」
「まあいいや。とにかく、今日は帰る。どうもサービスが悪いからな」
沢井は鷹揚ぶって、無理に笑顔を作っていたが、言葉には、皮肉がまじっていた。
「ごめんなさい。でも、きょうはしょうがないのよ。ごめんなさいね」
本来なら、一応、ここでは沢井を押し止め、もう一度、ボックスに坐らせるべきなのだが、

私は、わざとそうしなかった。

沢井が帰ってしまえば、店内には、私の客はいなかった。晴子たちが相手をしている、大仲と細田なる客のそばに行ける。わずかの間だったが、私はそんなことを考えた。

大仲という男に対する興味が、私の胸に拡がり、それは、すでに溢れるばかりになっていた。一種の冒険だということもできるだろう。或いは、何かが中途半端なとき、どちらかに決めずにはいられないという、人間が誰でも持っている心理。そういったものが、沢井から早く解放されたい欲望を、私に植えつけたのだった。

沢井は、ちょっと眉をひそめたが、それ以上は何も言わず、出口へ通ずる階段を上って行った。

私は、一応、そこまで彼を送ってから、足早に引き返した。そして、わざと澄した表情を作って、問題のボックスへ近づいた。大仲と呼ばれる男が、どんな反応を示すか、それが、ある意味では楽しみであった。

もし……、大仲が河原田だったとしたら、彼はさぞ慌てることだろう。私としても、前夫とこんな形で会うのは好ましくないが、相手にも偽名を使っているという弱味がある。ばつの悪さは、私以上であるはずだった。恐らく、私の前でも、飽くまで白を切ろうとするだろうが、その狼狽ぶりをゆっくり観賞してみたい気持も、意外に強い。そして、その破綻の最も大きく現われるのは、最初に私の姿を認めたときであろう？　相手に、何らかの反応が現われたら、



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com